

〔原著〕 松本歯学 13 : 50~56, 1987

Key words : 歯周病患者 — 主訴 — 初期治療 — 統計

歯周病患者の統計的観察
第2報 昭和55~57年における初診時の主訴と
その処置についての検討

金山奎二, 宇都宮淳, 樽井邦博, 伊藤茂樹
塩谷清一, 小沢嘉彦, 太田紀雄

松本歯科大学 歯周治療学講座 (主任 太田紀雄 教授)

Statistical Studies on the Patients with Periodontal Diseases
Part 2. The statistical observations of chief complaint in the
first visit and their initial preparation in 1980~1982

KEIJI KANAYAMA, ATSUSHI UTSUNOMIYA, KUNIHIRO TARUI,
SHIGEKI ITOH, SEIICHI SHIOGAI, YOSHIHIKO OZAWA and NORIO OTA

Department of Periodontology, Matsumoto Dental College
(Chief : Prof. N. Ota)

Summary

We investigated the periodontal disease of 393 patients (240 males and 153 females) who visited the periodontics department in the Matsumoto Dental College Hospital, from January 1980 to December 1982. The records of the periodontal patients showed the chief complaint, plaque control score, location of the complaint, Gingival Index (GI), Plaque Index (PI), Calculus Index (CI), mobility, pocket depth, width of attached gingiva, degree of bone loss and other clinical findings from the first visit, the progress of the disease and its initial preparation.

1. In March 40-50 year-old patients of both sexes were most numerous, and in most cases the chief complaint was unpleasantness.
2. The location of the chief complaint was generally the anterior teeth of both arches, and there were many cases in which the Gingival Index was 3, the Plaque Index was 3, the Calculus Index was 2, and mobility was 1.
3. The plaque control score at the first visit was 81-85% and the state of oral hygiene was bad.
4. Cases in which the pocket depth was 4.0mm and the width of the attached gingiva was 2.6-3.0mm were numerous.

- 5. Almost all of the patients visited the clinic with diseases in the mild stage.
- 6. Besides scaling and brushing instruction, temporary splint by wire and resin ligation were the most commonly used methods of periodontal treatment.

緒 言

前回¹⁾、我々は歯周病患者がどのような状態で来院するかを把握する為、昭和53年1月より昭和54年12月までの間に来院した患者の初診時における主訴、初診時プラークコントロールスコア、主訴部位とその部位における臨床所見としての歯肉炎指数(G.I.)、プラーク指数(P.I.)、歯石指数(C.I.)、動揺度、ポケットの深さ、付着歯肉の幅、骨吸収度、さらに臨床分類における進行度及び処置内容について比較検討した。その結果、主訴は動揺が多く上下顎前歯部に集中しており、プラークコントロールスコアも70%前後と口腔清掃状態は不良で臨床分類による進行度は中等度が多く処置内容は暫間固定が多かったという成績を得た。今回はさらに昭和55年1月から昭和57年12月までの間に来院した患者について前回¹⁾と同様の方法を用いて統計的観察を行なったので報告する。

資料及び研究方法

1 資料

昭和55年1月より昭和57年12月までの間に松本歯科大学病院歯周病科に来院した患者のうちほぼ資料の整っている男性240名、女性153名の計393名を対象とした。

2 研究方法

当科では初診時の診査の手順として、歯周チャート用紙(記録用紙)に診査内容を記入し又質問表に記入している。今回は記録された歯周チャート用紙において、来院の月、年齢、主訴、初診時プラークコントロールスコア(P.C.R.)はO'Leary²⁾、主訴部位とその部位の臨床所見としてのG.I.はLöe³⁾、P.I.はSilnessとLöe⁴⁾、C.I.はGreenとVermillion⁵⁾、動揺度、ポケットの深さ、付着歯肉の幅、骨吸収はScheiら⁶⁾の骨吸収メジャー測定法、さらに臨床分類による進行度及び処置について比較検討した。

結 果

1 来院歯周病患者の月別分布について

来院患者は3月が最も多く49名(12.5%)(図1)で男性が30名(7.6%)、女性が19名(4.9%)であり、次いで10月が多く48名(12.2%)で男性が28名(7.1%)、女性が20名(5.1%)を占めている。来院の月と年齢との関係を見ると3月では30歳代が最も多く(31.2%)、次いで40歳代(25.0%)、10月では40歳代が最も多く(42.6%)約半数を占め、次いで20歳代と50歳代が(19.1%)多かった。
2 年齢別分布について

来院患者のうち40歳代が最も多く137名(35.1%)(図2)で男性85名(21.8%)、女性52名(13.3%)となり、次いで50歳代が多く87名(22.3%)で男性59名(15.1%)、女性28名(7.2%)を占めた。

3 主訴別分布について

来院の動機となった主訴については違和感が最も多く99名(25.2%)(図3)で、男性が65名(16.5%)、女性が34名(8.7%)を占め、次いで出血が多く71名(18.0%)で、男性39名(9.9%)、女性32名(8.1%)となった。主訴と年齢との関係は違和感については40歳代(38.9%)が最も多く、次いで30歳代(18.9%)となり、出血については30歳代(31.9%)、続いて40歳代(23.2%)となった。

4 初診時プラークコントロールスコア

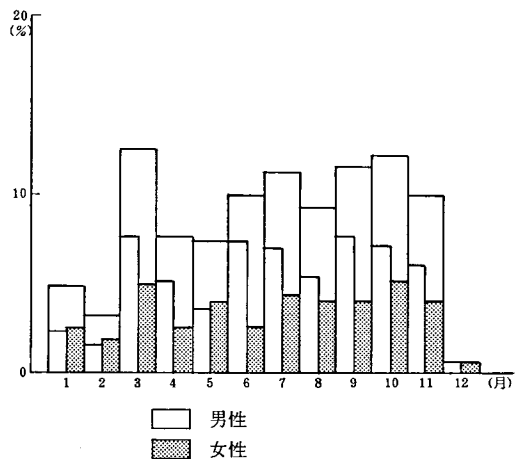


Fig. 1. Distribution of first visit month

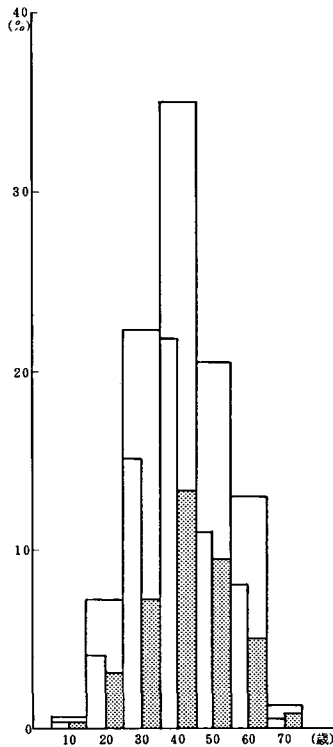


Fig. 2. Distribution of age

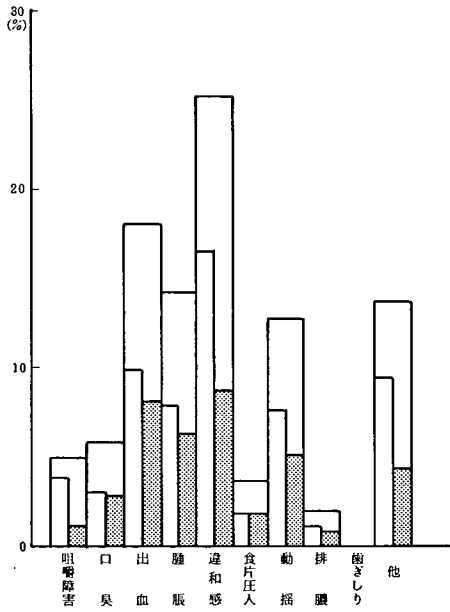


Fig. 3. Distribution of chief complaint

初診時におけるブラークコントロールスコアについてはP.C.R.81~85%が43名(11.3%) (図4)と最も多く、男性が31名(8.2%), 女性が12名(3.1%)であった。次いで多いのはP.C.R.71~75%の42名(11.1%)で、男性28名(7.4%), 女性14名(3.7%)を占めた。ブラークコントロールスコアと年齢との関係はP.C.R.81~85%では40歳代(41.9%)が多く、次いで50歳代(18.6%)となった。P.C.R.71~75%については40歳代(35.7%)が多く、次いで30歳代(26.2%)となった。

5 主訴部位の分布について

主訴とする部位で最も多かったのは、下顎前歯部の50名(41.0%)で、男性が26名(21.3%), 女性が24名(19.7%)となった。次いで多かったのは上顎前歯部の38名(31.1%)で、男性が18名(14.8%), 女性が20名(16.4%)を占めた。主訴部位と年齢との関係は下顎前歯部では40歳代(30.0%)が多く、次いで50歳代(24.0%)となり、上顎前歯部では40歳代(36.8%)が多く、次いで30歳代(23.7%)の順となった。

6 歯肉炎指数(G.I.)の分布について

主訴部位の歯肉炎指数(G.I.)についてはG.I.3が最も多く210名(54.0%) (図5)と半数以上を占め、男性が133名(34.2%), 女性が77名(19.8%)

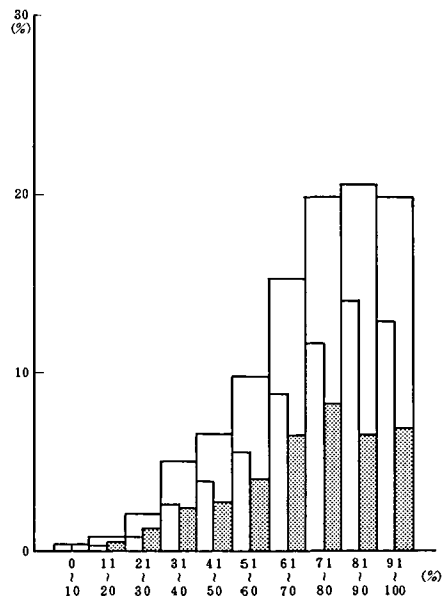


Fig. 4. Distribution of P.C.R.

となり、次いで多かったのはG.I.2の120名(30.8%)で、男性68名(17.5%)、女性52名(13.3%)を占めた。G.I.と年齢との関係はG.I.3では40歳代(38.0%)が最も多く、次いで50歳代(25.0%)となり、G.I.2では40歳代(28.8%)が多く、次いで30歳代(23.7%)となった。

7 プラーク指数(P.I.)の分布について

主訴部位のプラーク指数(P.I.)ではP.I.3が最も多く169名(43.7%) (図6)で、男性が116名(30.0%)、女性が53名(13.7%)となり、次いで多いのはP.I.2の146名(37.7%)で、男性が83名(21.4%)、女性が63名(16.3%)を占めた。P.I.と年齢との関係はP.I.3では40歳代(34.3%)が最も多く、次いで50歳代(23.1%)となり、P.I.2では40歳代(35.2%)が多く、次いで50歳代(22.8%)となった。

8 歯石指数(C.I.)の分布について

主訴部位の歯石指数(C.I.)ではC.I.2が最も多く137名(35.6%) (図7)で、男性が82名(21.3%)、

女性が55名(14.3%)となり、次いで多いのはC.I.1の125名(32.5%)で、男性67名(17.4%)で、女性が58名(15.1%)を占めた。C.I.と年齢との関係はC.I.2では40歳代(40.0%)が最も多く、次いで50歳代(20.7%)と続いている。C.I.1では40歳代(34.4%)が多く、次いで30歳代(24.6%)となった。

9 動揺度の分布について

主訴部位の動揺度では動揺度1が最も多く126名(32.1%) (図8)で男性81名(20.6%)、女性45名(11.5%)となり、次いで多いのは動揺度2の110名(28.0%)で男性62名(15.8%)、女性48名(12.2%)を占めた。動揺度と年齢の関係は動揺度1では40歳代(38.4%)が最も多く、次いで30歳代(21.6%)となり、動揺度2では40歳代(32.7%)が最も多く、次いで50歳代(31.8%)が多かった。

10 ポケットの深さの分布について

主訴部位のポケットの深さでは4.0 mmが最も

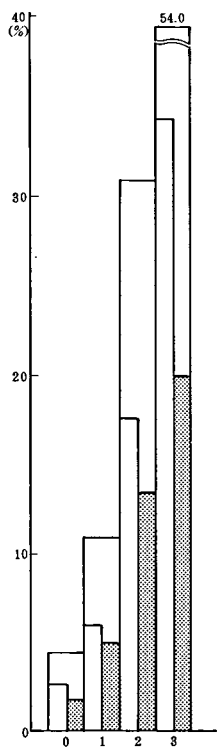


Fig. 5. Distribution of gingival index

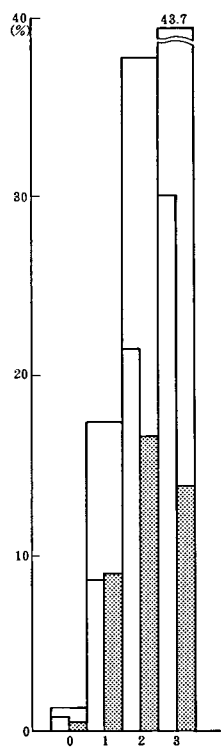


Fig. 6. Distribution of plaque index

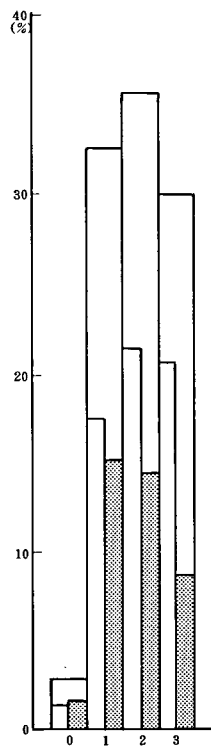


Fig. 7. Distribution of calculus index

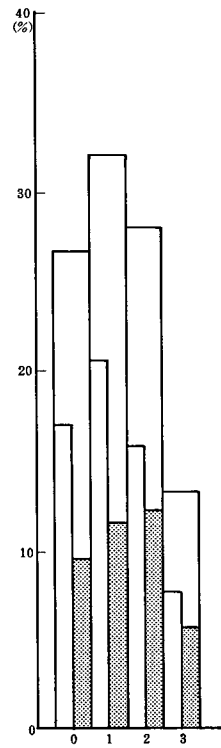


Fig. 8. Distribution of mobility

多く110名(28.0%) (図9)で男性が63名(16.0%)で、女性が47名(12.0%)となり、次いで多かったのは3.0 mmの95名(24.1%)で、男性が58名(14.8%), 女性が37名(9.3%)であった。ポケット

トの深さと年齢との関係はポケットの深さ4.0 mmでは40歳代(33.3%)が最も多く、次いで30歳代(26.9%)となり、ポケットの深さ3.0 mmでは40歳代(31.2%)が最も多く、次いで50歳代(24.7%)と続く。

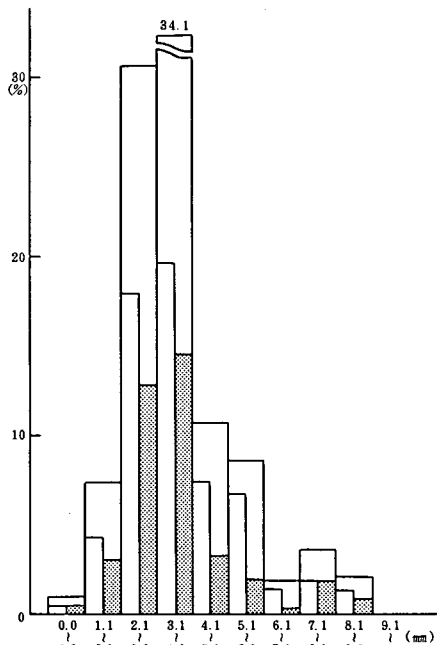


Fig. 9. Distribution of pocket depth

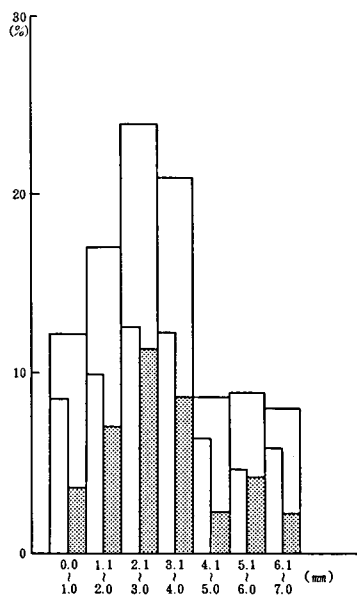


Fig. 10. Distribution of attached gingiva

11 付着歯肉の幅の分布について

主訴部位の付着歯肉の幅は2.6~3.0 mmが最も多く61名(17.0%) (図10)で、男性が33名(9.2%), 女性が28名(7.8%)となり、次いで多かったのは3.6~4.0 mmで60名(16.8%), そのうち男性が35名(9.8%)で女性が25名(7.0%)であった。付着歯肉幅と年齢との関係は付着歯肉の幅2.6~3.0 mmでは30歳代(28.3%)が最も多く、次いで40歳代(26.7%)となり、付着歯肉の幅3.6~4.0 mmでは逆に40歳代(40.0%)が最も多く、次いで30歳代(30.0%)となった。

12 骨吸収度の分布について

主訴部位の骨吸収度は46~50%が最も多く48名(14.1%) (図11)で男性35名(10.3%), 女性13名(3.8%)となり、次いで6~10%が多く34名(10.0%)で、男性18名(5.3%), 女性16名(4.7%)となった。骨吸収度と年齢との関係は骨吸収46~50%では40歳代(40.0%)が最も多く、次いで50歳代(24.4%)となり、骨吸収6~10%では30歳代(29.0%)が多く、次いで20歳代, 40歳代(25.8%)が同数を占めた。

13 臨床分類による進行度の分布

結果より臨床分類の進行度については、軽度が

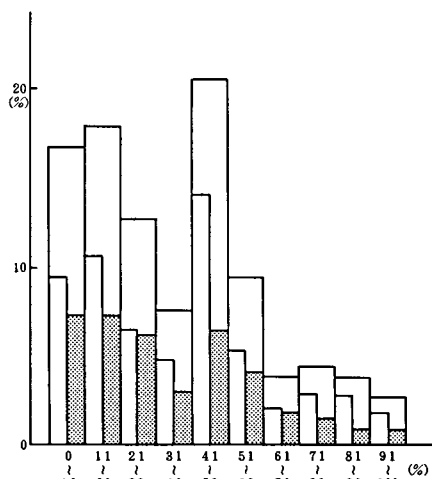


Fig. 11. Distribution of bone loss

最も多く141名(47.6%) (図12)で男性87名(29.4%), 女性54名(18.2%)となり, 次いで多かったのは中等度の129名(43.6%)で男性77名(26.0%), 女性52名(17.6%)となった。進行度と年齢の関係は, 軽度では40歳代(40.4%)が最も多く, 次いで30歳代(22.7%)となり, 中等度では40歳代(34.1%)が最も多く, 次いで50歳代(31.0%)となった。

14 処置内容による分布

当科では来院患者の大多数が初期治療としての歯石除去, 刷牙指導を受けており, それらを除いての処置について最も多かったのは暫間固定の153名(38.9%) (図13)で男性90名(22.9%), 女性63名(16.0%)となり, 次いで多かったのは咬合調整の130名(33.1%)で男性81名(20.6%), 女性49名(12.5%)となった。処置内容と年齢の関係は暫間固定では40歳代(31.6%)が最も多く,

次いで50歳代(31.0%)となり, 咬合調整では40歳代(32.8%), 次いで50歳代(29.8%)の順に多い結果となった。

以上の結果において, 男女間における χ^2 検定の結果, 有意差は認められなかった。

考 察

来院患者の構成は40歳代, 50歳代, 30歳代の順で多く, 女性では40歳代, 30歳代, 50歳代の順となった。前回¹⁾の報告ではピークが30歳代であったのに対し今回の結果ではピークが40歳代となった。

又20歳代が60歳代を上回って多いことは前回と同様であった。来院の月別では3月, 10月の順に多く, 前回の2月, 3月と異なっていた。3月においては30歳代の占める割合が高かったが10月では40歳代が多かった。主訴については違和感(25.2%), 出血(18.0%)の順であり, 前回¹⁾最も多かった動揺は12.7%と5番目に低い結果となり, 今回最も多かった違和感は前回2番目であった。違和感については40歳代の特に男性に多く, 出血については男女共に30歳代に多かった。ブランクコントロールスコアについてみるとP.C.R. 81~85%が最も多く前回多かったP.C.R.

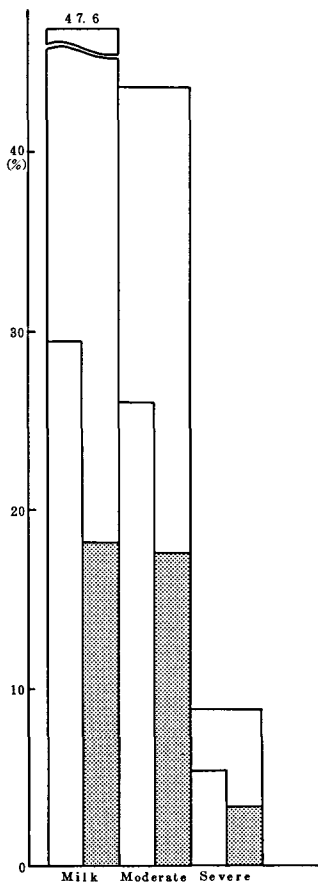


Fig. 12. Distribution of diagnosis

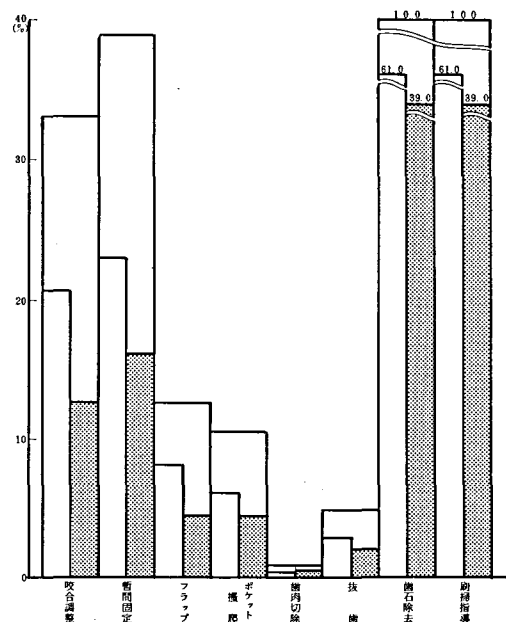


Fig. 13. Distribution of treatment

66~70%より更に口腔清掃状態は不良であるという結果が出され、特に40歳代男性に多くみられた。又、次に多かったP.C.R. 71~75%についても40歳代の男性に多く、逆にP.C.R. 20%以下については4名(1.2%)という結果であった。

主訴部位については前回¹⁾同様に上下顎前歯部に集中しており、主訴との関係をみると動揺、出血という主訴が多く、共に40歳代が多かった。歯肉炎指数(G.I.)については前回¹⁾同様G.I. 3が最も多く40歳代の男性に多かった。プラーク指数(P.I.)についてはP.I. 3が最も多く前回のP.I. 1より悪い結果となった。又、P.I. 3では40歳代の男性の占める割合が多かった。歯石指数(C.I.)においては前回同様C.I. 2が最も多く、同じく40歳代の男性に多かった。動揺度については前回動揺度2度が多かったが、今回は動揺度1度が多く40歳の男性に多かった。ポケットの深さは前回同様4.0 mmが40歳代に多く、付着歯肉幅は前回3.6~4.0 mmが最も多かったのに対し今回は2.6~3.0 mmが最も多く30歳代に多かった。又、次に多かったのは3.6~4.0 mmでこちらは40歳代に多い結果となった。骨吸収度では前回同様46~50%が最も多く40歳代に多かった。臨床分類による歯周病進行度では男女共に軽度が多く、中でも40歳代が最も高い割合を占めた。次に多かったのは前回最も多かった中等度で男性では50歳代、女性では40歳代に多かった。又、今回は重症になるに従って男性の占める割合が増加している傾向にあった。処置内容については初期治療としての歯石除去刷掃指導を除いて前回同様に暫間固定が最も多く次いで咬合調整であった。

以上の考察より年齢、来院月、主訴、プラークコントロールスコア、プラーク指数、付着歯肉の幅、臨床分類による進行度の分布については前回と異なった結果となったが、その他の項目では前回と同様な結果となった。又、各項目において最も多い指数、あるいは数値を占めているのは40歳代であり男性に多いという考察結果を得た。

結 論

昭和55年1月から昭和57年12月までに松本歯科大学病院歯周病科に来院した393名(男性240名、

女性153名)を対象に主訴、初診時プラークコントロールスコア、主訴部位、臨床所見としての歯肉炎指数(G.I.)、プラーク指数(P.I.)、歯石指数(C.I.)、動揺度、ポケットの深さ、付着歯肉の幅、骨吸収度、臨床分類による進行度、及び処置内容について統計的に検討し次の結果を得た。

1. 来院患者は3月に多く年齢は男女共に40歳代が多く主訴は男女共に違和感が多かった。
2. 主訴部位は上下顎前歯部に多く歯肉炎指数(G.I.) 3、プラーク指数(P.I.) 3、歯石指数(C.I.) 2、動揺度2度という状態が多かった。
3. 初診時プラークコントロールスコアは81~85%が最も多く口腔清掃状態はかなり不良であった。
4. ポケットの深さは4.0 mm、付着歯肉の幅は2.6~3.0 mmが多かった。
5. 臨床分類による歯周病の進行度では軽度が多く認められた。
6. 処置内容は初期治療としての歯石除去、刷掃指導を除いては暫間固定が多く、40歳代に多く認められた。

文 献

- 1) 金山奎二、宇都宮 淳、樽井邦博、伊藤茂樹、塩谷清一、小沢嘉彦、太田紀雄(1986) 歯周病患者の統計的観察。第1報 初診時の主訴とその処置についての検討。松本歯学, 12: 322-328.
- 2) O'Leary, T. J., Drake, R.B. and Naylor, J.E. (1972) The plaque control record. J. Periodontol. 43: 38.
- 3) Löe, H. (1967) The Gingival Index, the Plaque Index and the Retention Index Systems. J. Periodontol. 38: 610-616.
- 4) Silness, P. and Löe, H. (1964) Periodontal disease in pregnancy, II. Correlation between oral hygiene and periodontal condition. Acta Odont. Scand. 22: 121-135.
- 5) Green, J.C. and Vermillion, J.R. (1960) The Oral hygiene index; A method for classifying oral hygiene status. J. American Dent. Ass. 61: 172-179.
- 6) Schei, O., Waerhaug, J., Lovdal, A. and Arno, A. (1959) Alveolar bone loss as related to oral hygiene and age. J. Periodontol. 30: 7-16.